

俳句の力学

岸本尚毅

内容理解

この文章で筆者は、いくつかの作例を示しながら、俳句の本質的な力を説明しようとしている。本文を読み直しながら、空欄に入る適切な言葉を補ってみよう。

有季定型という堅牢な器は多様な素材を俳句として消化する力を持っている。

・「思想の上からは大概のものは採る。非常に憎悪すべきものは採らない。／措辞の上からは最も厳密に検討する」という虚子の言葉は、「」よりも「措辞」の俳句らしさを重視している。

・「医師の秋」「人の秋」のように五七五の言葉の塊の中に「秋」というがあれば俳句らしく見える。俳句のが内容にどのような影響を与えているか、考察が必要である。

・俳句の「小ささ」は自由をもたらず。日本語に馴染みの深いと七音で構成され、古今の名句が人々に記憶され、季題は日本人の感覚に即している。俳句形式は日本人の意識の中に根強く堅牢に存在する。時代の風雪に耐えてきた俳句という器は、高温高圧に耐える丈夫な試験管のようなもので、詩人は自由な発想で、俳句という試験管に複数の言葉を放り込み、思わぬ化合物が誕生するのを期待する。

〈例1〉春の月ありしところに梅雨の月
十七音の器に「春の月」と「梅雨の月」を放り込み、季節の推移による月の表情の変化と、月日の厚みを表現している。

〈例2〉てんと虫一兵われの死なざりし
であればこそ、その中に投じられた言葉と言葉との関係は鮮烈にクロローズ

安住 敦

語句

この文章の中で使われていた次の言葉を使って、短文を作ってみよう。

由来（三七〇・二）

大概（三七〇・四）

中立（三七〇・七）

帰着（三七一・三）

アップされる。俳句が頑丈な試験管、坩堝るつぽのようなものであるからこそ、その中に⁷

〈例3〉 目には青葉山ほととぎす初松魚はつがつを

梅若菜まりこの宿のとろろ汁

素堂
芭蕉ばしやう

ばか、はしら、かき、はまぐりや春の雪

久保田万太郎

・俳句の「小ささ」は発想の自由さとともに、発想の⁸

さを招来する。「材料の複雑

と単純、ということになると比較的単純なものを採る。俳句本来の性質として単純に叙して複雑な効果をもたらすものを尊重する」と虚子は言う。

〈例4〉 神にませばまこと美うるはし那智なちの滝

滝の上に水現れて落ちにけり

高浜虚子
後藤夜半

滝落ちて群青世界とどろけり

水原秋桜子

これらの句は割り切つて物を見、風景を単純化している。「冬山の青岸渡寺の庭にいでて風にかたむく那智の滝見ゆ」（佐藤佐太郎）のような、風景の表情にあやをつけた詠い方とは⁹

的である。

俳句の形式は堅牢で、内容は単純、それが俳句に「何でもあり」の¹⁰

をもたらしている。

要旨

筆者の考えの中で最も大切と思われることを、指定された言葉を使って、百字程度の文章にまとめてみよう。
〈指定語——俳句・定型・季題〉

発展

次の中で興味を持った事項について、図書館の書籍やインターネットなどを使って調べてみよう。

・素堂とは、どのような俳人か。

・芭蕉とは、どのような俳人か。

・久保田万太郎とは、どのような人物か。

100